

相良亨「日本的宗教性」 に基づいた 日本的スピリチュアルケア試論

武蔵野大学
小西達也

1. 今回の議論の前提(1)

■日本のスピリチュアルケアの世界において、果たして「日本的スピリチュアルケア」なるものはあり得るのか、あるとしたらそれはどのようなものか、ということは、これまで一つの大きなテーマとしてありつづけてきたが、未だ十分に議論されていない

■今回は、そうしたニーズに応える方向を模索する議論として、相良亨の「日本的宗教性」をベースとしたスピリチュアルケア理論について議論したい

1. 今回の議論の前提(2)

■ケアの理論は万人が認め得るものであることが求められる。そのためには、それが基づくところの人間観も、万人が認め得るもの(e.g.自律的個我的人間観)であることが求められる

■そうした前提に基づいた方向の、一つのケア理論について、昨年の本研究会においてお話させて頂いた

1. 今回の議論の前提(3)

■しかしながら今回の議論で前提としている相良の「日本的宗教性」は、それとは異なる、いわば特定の宗教的人間観に基づいたものであり、必ずしも万人が認め得るものではない

■しかしケアの可能性を追求していく上では、そうした理論の可能性の模索も必要であると考え

■相良の仮説の有効性の検討自体は、本論では行わない。それを所与のものとして論を進める。学問的厳密性を欠いた、かなり粗い議論になるが、あくまでも試論であるので、ご了承頂きたい

2. 既に提案したS/C定義 (S/C=スピリチュアルケア)

2.1 「ビリーフ」再構築としてのS/C ービリーフとはー

■「ビリーフ」(信念、belief)とは、価値観や世界観などの広義の信念。私たちの精神生活はそうしたものに基づいている

■多くの場合、私たちはそれらについて無自覚的であり、しかも暗黙のうちに正しいと思い込んでいる

■ビリーフには、世界観に関するものや価値に関するもの、また日常生活における単なる仮定のようなものから、私達の生きる目的、生きがいを支えているような、根源的なビリーフまで存在する

2.1 「ビリーフ」再構築としてのS/C ースピリチュアル・クライシスー

■失業、離婚、家族や自らの病や死などで、その人の生きがいを支えているような、根源的なビリーフが危機に陥った状態がスピリチュアル・クライシス(人生の試練)

(例)

- ・(第二次大戦中)「日本は勝つ」と信じていた人
→敗戦の知らせを聞いたとたん、生きる支えを失う
- ・「男の仕事は経済的に家庭を支えること」
→働けなくなった場合に、自らの存在意義を失う

■病院では多くの方がそうしたスピリチュアル・クライシスの状態にある (小西,2005)

7
©Tatsuya Konishi

2.1 「ビリーフ」再構築としてのS/C ービリーフ再構築ー

■そうした状況乗り越えるための一つの方法は、その状況下でも通用する新たなビリーフを再構築すること

■スピリチュアルケアは、そうしたビリーフ再構築のプロセスをサポートする

■再構築されるビリーフは、その本人が深いところから納得できるものでなければ意味がない。そのようなものを他者が与えることは容易でない

■基本的には本人自身でそれを見出していき、そのプロセスをスピリチュアルケアがサポートしていく

(小西,2012c) 8
©Tatsuya Konishi

2.2 「生き方」分節のサポートとしてのS/C

■『「生き方」分節のサポートとしてのS/C』: 困難な現実と直面して、自らの『「生き方」を見出すことが困難な状態にある人が、『「生き方」を見出していこうとするプロセスをサポートするもの

■人は自らが置かれた「生の立場」を「どう捉えるか」、また自らの深い意志「本当はどうしたいのか」「自分はどうかしたいのか」を明確化していくプロセスを通じて、その現実下での自らの「生き方」を見出していくことができる (小西,2015a)

※「生の立場」: その人の人生物語の中の立場。仮に私たちが本来は無属性的な魂のようなものであり、それが神のような超越的存在から、ある特定の『時代』『状況』『境遇』、そして『能力』『性格』を持った個人としての人生を生きるように定められた存在であると仮定した場合の、その与えられた『時代』や『境遇』、『能力』『性格』および、その瞬間瞬間の具体的に置かれた状況等を指す。

9
©Tatsuya Konishi

2.2 「生き方」分節のサポートとしてのS/C

■困難な現実下で新たな「生き方」を見出すためには、自己と世界(現実)の、「より深いリアリティへの目覚め」が必要。そのためには「既存のビリーフからの自由」が必要

■私たち精神生活は「ビリーフ」に基づいている。それは、ある特定条件下での認識や判断などをパターン化したもの

■それと異なる条件の現実下では、そのビリーフで対応していくことができない。また、特定ビリーフに基づいた在り方は、それ以外の在り方を妨げる機能も有している

■特に宗教の世界では、「より深いリアリティへの目覚め」が更に深まると、その個人の内面に「はたらき」なるものが現れるとされる(以下のスライド参照) (小西,2014b)

10
©Tatsuya Konishi

3. 宗教的世界観における 「はたらき」実在の主張

3. 宗教的世界観における「はたらき」

■多くの宗教が、「ビリーフからの自由」=「我執から自由」を実現すると、私たちがいわば超越の次元に目覚め、その超越の次元の「はたらき」に生きることができるとする

■「はたらき」は、いわばその人の「生き方」を導くもの

・キリスト教:「聖霊の働き」(新約聖書 コリント人への第一の手紙12:4~31)、「生きているのは、もはや、わたしではない。キリストが、わたしのうちに生きておられるのである。」(新約聖書・ガラテヤ人への手紙2:20)

・「活(はたら)き」(門脇)、「くはたらく神>」(八木)

資料: 門脇佳吉「道の形而上学」、岩波書店、1990年、八木誠一「くはたらく神>の神学」、岩波書店、2012年

・仏教「弥陀のはたらき」、仏性(のはたらき)

・Alfred North Whitehead "Initial Aim"

■上記の人間観・世界観の間には、ある一定レベルの共通性が存在すると考えることも可能 (小西,2008a, 2014c)

12
©Tatsuya Konishi

3. 宗教的世界観における「はたらき」

■「はたらき」は、個人の内面を通じてはたらく
(更には、世界、宇宙にもはたらいているとされる)

資料: 門庭佳吉「道の形而上学」、岩波書店、1990年、八木誠一「くはたらく神」の神学、岩波書店、2012年

■その「はたらき」に基づいた「生き方」の実現・実践がそうした宗教の本質的な目標となってくる

■スピリチュアル・クライシスに陥った時、ビリーフ再構築のみならず、むしろそうした「はたらき」に生きることも一つの「生き方」の目標となり得る

■以下で紹介する、相良亨「日本的宗教性」の「おのずから」も、そうした「はたらき」の一種と捉えることも可能

13
©Tatsuya Konishi

4. 相良亨の「日本的宗教性」

4.1 相良亨の「日本的宗教性」

■相良亨(さがらとおる、倫理学者、1921- 2000)

■古事記以来の日本文化の底流を流れるものとしての「日本的宗教性」なるものを主張

■相良は、日本人が、世界、宇宙のリアリティを「生成」と捉えているとする。相良はそれを「おのずから」と表現

■「・・・『おのずから』が歴史はじまって以来、日本人の意識の古層に流れてきたものである・・・」
「・・・『おのずから』は、日本人の心の在り方の根源にかかわるものである・・・」 (小西,2008c)

資料: 相良亨著作集5「日本人論」(1992年)、著作集6「超越・自然」(1995年)、ベリかん社

15
©Tatsuya Konishi

4.1 相良亨の「日本的宗教性」

■日本人の自然観・世界観の基本的な考え方:
「日本人にとって宇宙の究極は人格的な超越者ではなく、『おのずから』なる生成の働きそのものである・・・」

■「中国及び欧米の関係語と比較する時、日本の『おのずから』としての自然が、(存在としての「神」や「天」といった)本性・本質、あるいは秩序の意を持たず、ただ『おのずからなる』こと自体を内容としていることは、極めて注目すべき特色である。」

資料: 相良亨著作集5「日本人論」(1992年)、著作集6「超越・自然」(1995年)、ベリかん社 (小西,2008c)

16
©Tatsuya Konishi

4.2 「おのずから」の「はたらき」(古事記)

■「日本の神話は、この世界を、なりゆく世界として捉える。内在するムスビ(産霊)の霊力によって不断に内発的になりゆく世界である。」

■「『古事記』本文冒頭の一文『天地初発(あめつちはじめ)の時に、高天原(たかまのはら)に成りませる神の名は、天之御中主(あめのみなかぬし)の神、次に、高御産巢日(たかみむすび)の神、次に、神御産巢日(かみむすび)の神』である。ここには、エネルギーの天地初発の時の噴射によって神がなり、さらなる噴射によって次の神がなり、かくてつぎつぎに神々や万物が成りゆくという発想が示されている。」 (小西,2008c)

資料: 相良亨著作集5「日本人論」(1992年)、著作集6「超越・自然」(1995年)、ベリかん社

17
©Tatsuya Konishi

4.2 「おのずから」の「はたらき」(古事記)

■「宇宙の究極、宇宙の一番奥にあるもの、それは日本人にとって人格的超越者ではなく、この生成の働きそのものであるということになろう。それは『おのずから』なる働きを究極として捉えるものであり、神々も万物もこの『おのずから』の働きから次々に成れるものであるということになろう。」 (小西,2010)

資料: 相良亨著作集6「超越・自然」ベリかん社、1995年

18
©Tatsuya Konishi

4.2 「おのずから」の「はたらき」(本居宣長)

■本居宣長(1730-1801)は、不可測(測り知ること
はできない)ではあるが、妙なる「産霊(むすび)の
御霊(みたま)」によって天地万物が「成就」した
(『くず花』)という。

■「おのずから」としての自然の生成は、この宇宙
を成り立たしめる根源(の働き)である(と宣長は
捉えた)。

資料:相良亨著作集6「超越・自然」ペリカン社、1995年、「日本の思想—理・自然・道・心・伝統」、ペリカン社、1989年

(小西,2008c)

19
©Tatsuya Konishi

5. 「おのずから」の3つの特徴

5. 「おのずから」の世界観の3つの特徴

I. 「おのずから」は「存在」ではなく、むしろ「生成」
あるいは「出来事」とも言うべきものである

II. 「おのずから」ではそれと独立したものとしての
その主体や作用者を想定しない傾向がある

III. 「おのずから」は、究極目的を有さない(ただ
おのずから生成する)

(小西,2010)

資料:相良亨著作集5「日本人論」(1992年)、著作集6「超越・自然」(1995年)、ペリカン社を参考に作成

21
©Tatsuya Konishi

5.1 「おのずから」の世界観の3つの特徴

I. 「おのずから」は「存在」ではなく、むしろ「生成」
あるいは「出来事」とも言うべきものである

・現代の一般的な「自然」概念:「人工物」の反対語

・日本語の「自然」:「じねん」、「おのずからしからしむ」
→これは「おのずからの生成」、すなわち「おのずから」
を意味するとも言える

・その意味で「自然」は、「存在」というより、むしろその
「生成」としてのダイナミックな側面、あるいは「出来事」
としての側面に焦点が当てられているとも言える

(小西,2010)

資料:相良亨著作集5「日本人論」(1992年)、著作集6「超越・自然」(1995年)、ペリカン社を参考に作成

22
©Tatsuya Konishi

5.1 Alfred North Whitehead (1861-1947)

■イギリス出身の数学者、哲学者(後年ハーバード大学の哲学者とし
て活躍)

■主著「Principia Mathematica」(Russelと共著、1910)、「Process
and Reality」(1929)

■科学的世界観と宗教的世界観、キリスト教的世界と仏教的世界観を
統合する理論としても注目される

■ホワイトヘッドは、一般にはこの世の現実の最も基本単位は、
例えば原子やクォーク等の素粒子のような、いわば「存在」ではなく
一瞬一瞬繰り返される「生起」と「消滅」という「出来事(Event)」である
と主張

■いわゆる「存在」は、同じ出来事が、ある一定期間継続的に生起/
生滅を繰り返している状態

■この「出来事」という考え方は、「おのずから」の世界観に通じる面を
有していると考えられる

(小西,2010)

23
©Tatsuya Konishi

5.2 「おのずから」の世界観の3つの特徴

II. 「おのずから」ではそれと独立したものとしてのその
主体や作用者を想定しない傾向がある

・何らかの「はたらき」が見られる場合、それを因果律的に
捉えるならば、そこに何らかの「主体」や作用者、動因と
なっている人格的存在を想定することになる

・たしかに「日本の宗教性」に分類される考え方の中にも「神」
や「産霊の霊力」等の表現は見られる(e.g. 本居宣長)が、
「世界は神によって創造された」というほど積極性を有する
人格的主体ではない

・どちらかという、「ただなされる」「おのずからなされる」との
ニュアンスをもつものとして捉えることができる

(小西,2010)

資料:相良亨著作集5「日本人論」(1992年)、著作集6「超越・自然」(1995年)、ペリカン社を参考に作成

24
©Tatsuya Konishi

5.3「おのずから」の世界観の3つの特徴

III.「おのずから」は、究極目的を有さない(ただ自ずから生成する)

- 荻生徂徠「天には生々の意はあるが、生々の方策について思慮する心がない」
- 何らかの秩序の形成に向かって、そうした生成がなされている、との発想が見られない。「ただ生成される」
- しかしながら、何ら目的のない、無意味な、カオス的な動きを意味するのではない。むしろそれらが人間の思惟を超えたものである、というニュアンス、すなわち、「人間には測り難い『深き妙なる理』がこもっているのである」(小西,2010)

資料: 相良亨著作集5「日本人論」(1992年)、著作集6「超越・自然」(1995年)、ペリカン社を参考に作成

25

©Tatsuya Kimishi

5.3 Gordon Kaufman(1925-2011)

■ 神学者、ハーバード大学名誉教授、AAR (American Academy of Religion) 元会長

■ 主著: *In Face of Mystery* (1995), *In The Beginning ... Creativity* (2000)

■ 仏教者との対話を重ねていく中で、その神学を大きく変更。神は存在ではなく、また、何かを創造する創造者、作用者でもなく、「創造性 (Creativity)」そのものであると主張

■ また、その神としての創造性は、何らかの秩序の実現を推し進めるものでもなく、逆にカオスの実現を推し進めるものでもないものである (God is not aiming at Chaos nor Order) と主張

■ 更には「神は哲学的に正確な意味で神秘であり、あらゆる知を超えたものであると捉えるのがふさわしい」ものであり、「Utter Mystery (全き神秘)」であるとも主張 (小西,2010)

26

©Tatsuya Kimishi

6.「おのずから」の「はたらき」に生きる
=「おのずから」を「みずから」生きる
主体的媒介者

6.1「おのずから」を「みずから」生きる

三浦梅園(1723-1789)、荻生徂徠(1666-1728)

■ 「(三浦梅園の言説も)・・・自己を、あるいは自己の心を『おのずから』なれるものと捉えることによって、『みずから』生きることをまさにその『おのずから』性に徹して生きることとして捉えたものである。」

■ 「日本の思想史において作為を強調した・・・荻生徂徠(においても)・・・聖人の制作行為は・・・自然に随順しつつ、自然の生々の意を実現する営みである(とされた)。」

資料: 相良亨著作集5「日本人論」(1992年)、著作集6「超越・自然」(1995年)、ペリカン社

28

©Tatsuya Kimishi

6.1「おのずから」を「みずから」生きる 安藤昌益(1703-1762)

■ 「(安藤昌益は、)自然(万物生成の働き)を『われとする』(みずからを通じて働かせる)と捉える・・・『おのずから』は、主体的・内面的な生き方において捉えられてくる。万物が、そして人間が『おのずから』の物であるがゆえに・・・(人間個人が)『みずから』に生きることが、また『おのずから』であるのである。」

資料: 相良亨著作集5「日本人論」(1992年)、著作集6「超越・自然」(1995年)、ペリカン社

(小西,2008c)

29

©Tatsuya Kimishi

6.1「おのずから」を「みずから」生きる 松尾芭蕉(1644-1694)

■ 「芭蕉は、この宇宙そのものを(「おのずから」の働きとしての)永遠の旅人とみる。・・・(人が)造化(=「おのずから」の働き)の中へ日常から離脱することが、より深く生きることである。」

■ 「・・・漂泊において造化にしたがひ造化に帰りゆくことが目的である。造化にしたがひ造化に帰りゆくという意味での超越する営みがこの漂泊の旅である。」

資料: 相良亨著作集5「日本人論」(1992年)、著作集6「超越・自然」(1995年)、ペリカン社

(小西,2008c)

30

©Tatsuya Kimishi

6.2 「おのずから」の二つのはたらき方

■「はたらき」同様、「おのずから」でも2つの働き方があるとされる

- ①万物生成のはたらき(宇宙を通じたはたらき)
- ②現実にいかに対処すべきかを個人の内に生成するはたらき

■「(上記の①と②は、)・・・動的な一体的連関にあると考えられる。人間は、宇宙のおのずからな生成を、さらなる生成へと媒介する主体である。自然的生成の主体的媒介者である。」

資料:相良亨著作集5「日本人論」(1992年)、著作集6「超越・自然」(1995年)、ベリカン社 (小西,2008c)

31
©Tatsuya Kimishi

6.3 「おのずから」は個体の生死を越える 伊藤仁斎(1627-1705)

■「伊藤仁斎も・・・個人個物の死をこえる生々化々(せいせいかか)の無窮の運動自体に天地を捉えていたというべきであろう。」

■「この世の生は無窮の生成より成り現れたもので、この世の生に生きること自体が、無窮の生成・・・死も無窮の生成、つまり自然そのものに帰ることであり・・・」

■「おのずから」のはたらきそのものになること＝生死を超越すること (小西,2008c)

資料:相良亨著作集5「日本人論」(1992年)、著作集6「超越・自然」(1995年)、ベリカン社

32
©Tatsuya Kimishi

7.「おのずから」の「はたらき」に生きるための 「無私」＝「ビリーフから自由な在り方」

7.1 「おのずから」の「はたらき」に生きる —「無私」の実践—

■「日本的宗教性」では、「おのずから」の「はたらき」に生きるための方法が、「無私」の実現・実践にあるとされる

■日本文化の中で伝統的に重視されてきた徳、例えば「清明」、「正直」、「誠」といったものは、「無私」に基づいた在り方を指していると考えることが可能

資料:相良亨著作集5「日本人論」(1992年)、著作集6「超越・自然」(1995年)、ベリカン社より作成

34
©Tatsuya Kimishi

7.2 「無私」とは(小林秀雄)

■「『物の動きに順じて自己を日に新たにすること』とは一種の無私である」

■「物の動きに順じて自己を日に新たにすること」＝「自己主張よりも物の動き(現実)を尊重すること」、「現実の新しい動き(古い解釈や知識が成り立たない現実)が看破(発見)されれば、それを無理やり保持しようとするのではなく、直ちにそれらを捨てる容易がある」こと

■無私的態度とは、「私」が「こうあってほしい」という、特定のビリーフに基づいた態度で現実と直面するのではなく、むしろそうした「ビリーフから自由な在り方」で「あるがまま」に接する態度を意味すると考えられる (小西,2010)

資料:相良亨著作集5「日本人論」(1992年)、著作集6「超越・自然」(1995年)、ベリカン社

35
©Tatsuya Kimishi

7.3 「無私」からの「おのずからの直観」

■「無私」＝「ビリーフから自由な在り方」を実践した時、瞬間瞬間、その場に応じていかに行為すべきか、いわば「おのずからの直観」(＝「はたらき」)が生起するとされる

■北畠親房(きたばたけちかふさ)『神皇正統記(じんのうしょうとうき)』(1343):「鏡は一物をたくはえず、私の心なくして、万象をてらすに是非善悪のすがたあらはれずと云ことなし。其すがたにしたがひて感応するを徳とす。これ正直(せいちよく)の本源なり(私の心なく現実に対する時、現実がいかに対処すべきか、ということが見えてくる・・・さらに、その見えてきたままに生きるのが人間のあるべき生き方である) (小西,2008c)

資料:相良亨著作集5「日本人論」(1992年)、著作集6「超越・自然」(1995年)、ベリカン社

36
©Tatsuya Kimishi

7.3 「おのずからの直観」の現れ方

■湯浅は、西田幾多郎(1870-1945)の哲学についての説明の中で、上記「おのずからの直観」に相当するものを「創造的直観」と呼び、次のように説明

■「…自己が日常的経験の場をこえてその底にかくれた『無の場所』に入ってゆくときには、この構造は逆転して、直観は能動的となり、行為は受動的となるのである。」

(湯浅泰雄「身体論」講談社、1990年、p82)

■「自己は『無の場所』に入ってゆくにつれて、みえざる根源から発する創造的直観の源泉である人格の統一力に打たれつつ、いわば反射的に、日常的生の世界に向って行為するといってもよからう。」(湯浅、p83) (小西,2010)

37
©Tatsuya Kimishi

8. 「おのずから」の「日本的宗教性」(まとめ)

8. 「おのずから」の「日本的宗教性」(まとめ)

①「日本人にとって宇宙の究極は人格的な超越者ではなく、『おのずから』なる生成のはたらきそのものである」

資料：相良亨著作集5「日本人論」(1992年)、著作集6「超越-自然」(1995年)、ベリカン社

②そうした「おのずから」の「はたらき」が個人の内面を通じてもはたらく

③無私の心(「ピリーフから自由な在り方」)で現実に対すると、その現実にいかに対応すべきかが見えてくる。そのような形で「おのずから」は個人にはたらく

④実はその「はたらき」こそが、私達の本性であり、それは生死を越えている

⑤その「はたらき」に生きることを理想とするのが日本的宗教性の本質である (小西,2008c)

39
©Tatsuya Kimishi

8. 「おのずから」の「日本的宗教性」

—神秘主義との類似性(参考)—

■世界の伝統宗教の神秘主義には、否定を通じて神性に至ろうとする方法論(「via negativa(否定道)」)が存在する

■中世キリスト教神秘主義: Meister Eckhart (1260-1328), Nicolaus Cusanus (1401-1464), Jakob Böhme (1575-1624)等

■その他、仏教(特に禅)を始め、ヒンズー教、イスラム教、ユダヤ教においても、類似の方法論やダイナミクスに関する記述が存在

■かなり粗い議論になるが、もしここで仮に、「日本的宗教性」の「無私」の在り方の実践を「否定道」の実践、「おのずから」を「神のはたらき」に相当するものと考えれば、相良の「日本的宗教性」は、それら否定道的神秘主義と近い構造を有するとも言える (小西,2010)

40
©Tatsuya Kimishi

9. 「日本的宗教性」に基づいたS/C

9.1 「日本的宗教性」に基づいたS/C —「おのずから」に生きることのサポート—

■相良の「日本的宗教性」の考え方に基づくならば、「おのずから」の「はたらき」に生きていくのが人間本来の「生き方」。それをサポートすることが「日本的宗教性」に基づいたスピリチュアルケア

■より具体的には、ケア対象者(「対象者」)が、「おのずからの直観」に基づいて、瞬間瞬間その状況における個別的な「生き方」を見出していくことをサポートすること

■無私で現実と向き合うと、「おのずから」の「はたらき」がはたらく→ケア対象者には「無私」=「ピリーフから自由な在り方」の実践が求められる→それを促すのがケア提供者(「提供者」)の役割か?

42
©Tatsuya Kimishi

9.2 「日本的宗教性」に基づいたS/C —「ビリーフからの自由」を求めることはできない—

■しかしながら、「ビリーフから自由な在り方」を「対象者」に促すことは、ケア対象者に対する「ビリーフから自由になるべき」とのビリーフの押しつけになり得る(スピリチュアルケア専門職・チャプレンの倫理綱領では、「押しつけ」は避けるべき第一の事柄)

■したがって、「提供者」が「対象者」に対して「ビリーフから自由な在り方」を直接促すことはできない

■では死と向き合っている人が、ビリーフから自由な在り方を実現するために、「提供者」にできることはないのだろうか。その一つとして考えられるのは、「提供者」による「ビリーフから自由な在り方」の実践

(小西,2014c)

43

©Tatsuya Konishi

9.3 「日本的宗教性」に基づいたS/C

—「ビリーフからの自由な在り方」の提供からの「生き方」分節のサポート—

■ケア対象者(「対象者」)はケア提供者(「提供者」)から「ビリーフから自由な在り方」で向き合ってもらえると、ケア提供者からのビリーフの「押しつけ」に対して身構える必要がなくなり、自身のビリーフをも手放しやすくなり、「ビリーフから自由な在り方」を実現しやすくなる(→「おのずから」「はたらき」に生きやすくなる)

■「対象者」の生育歴等様々なテーマについての語りの中で、「提供者」は「理解=自己表現のサポート」を提供していき、その中で「現実をどう捉えるか」、「自分が何を望んでいるか」といった事柄を明確化していく

■ケア対象者は対象者の「おのずから」「はたらき」に基づいた「生き方」を見出していくことができる

44

©Tatsuya Konishi

9.4 「日本的宗教性」に基づいたS/C

■「おのずから」を(Spiritの「はたらき」として捉え)、Spirituality (スピリチュアリティ)と捉えるならば、この「おのずから」に生きることをサポートするケアは、Spiritの「はたらき」に生きることをサポートするケア、すなわち「スピリチュアルケア」と呼ぶにふさわしいものと言うこともできる

45

©Tatsuya Konishi

「はたらき」の公共世界での位置づけ(参考)

■「はたらき」を公共世界の中でどのように扱うか?

■客観的に証明することは困難:「そうした認識は、それを信じる人のビリーフの一つに過ぎない」

■一般的には「哲学」ではなく「神学」として扱う

■しかし「一つのビリーフ」として扱うだけでよいのか?むしろ、既存世界観の修正こそが検討されるべきなのか?(cf.稲垣久和氏「世界4」の導入)

(稲垣久和「実践の公共哲学」春秋社, p117-118)

スライド内容出典一覧(1)

2005 ■小西達也「チャプレンとスピリチュアルケア」武蔵野大学大学院人間社会・文化研究科, 2005年

2007 ■小西達也「病棟チャプレンの役割」市民と共につくるホスピスケアの会第175回講座, 2007年

2008a ■小西達也「アメリカからスピリチュアルケアを考える」、谷山編『仏教とスピリチュアルケア』東方出版, 2008年

2008c ■「日米の看取りのプロセスから日本人の死生観と精神/宗教性を考える」、国際交流委員会シンポジウム、第32回死の臨床研究会年次大会、2008年

2010 ■Tatsuya Konishi, An Eastern Perspective on Spirituality and Care, A Symposium on Different Perspectives on Suffering and Spirituality when Caring for Families, 10th International Family Nursing Conference, 2010.

スライド内容出典一覧(2)

2012b ■小西達也「チャプレンという専門職の立場からスピリチュアルケアを考える」、第18回日本臨床死生学会大会, 2012年

2014b ■小西達也「『一』→『多』の人間観・世界観に基づいたスピリチュアルケア緒論—井筒哲学に依拠して—」The Basis 武蔵野大学教養教育リサーチセンター紀要第4号, 2014年

2014c ■小西達也「チャプレンの意見 ケア提供者は「死と向き合う人」とどう向き合ったらよいか—「ビリーフから自由な在り方」をキーワードとして—」医学シリーズ第31集『終末期の医療 ~多死時代に向けての心構え~』横浜市医師会, 2014年

2015a ■小西達也、「異宗教間ケア」の原理と方法論—「一/多」の人間観の観点から—、現代宗教2015、国際宗教研究所, 2015年

48